



## 雲崗の石佛

南北朝時代は佛教が盛であつたので、それに伴つて建築乃至彫刻が進歩した。當時の諸遺品は、現在尙、山西省の雲崗、河南省の龍門、甘肅省の敦煌等の石窟に代表的なものが見られる。雲崗の石佛は、一説によれば、北魏の時代に、文成帝が父祖五代への孝養、祖父太武帝の佛教迫害の懺悔滅罪、さては佛教興隆などのために、天然の

岩山の中腹に造營したものといはれ、東西十町近くに亘る大小様様の石窟である。圖は雲崗の岩面彫刻中、最も大きい石佛の一つで、高さは五十尺内外である。北部インドに發達したガンダーラ様式や中部インドのグプタ様式の影響が見られるのは、注目すべきであり、南北朝時代の彫刻の絶品として、極東の美術史上において絶大な價值を誇つてゐるものである。

(昭和一三・九・七 小林元撮影 禁複寫)

